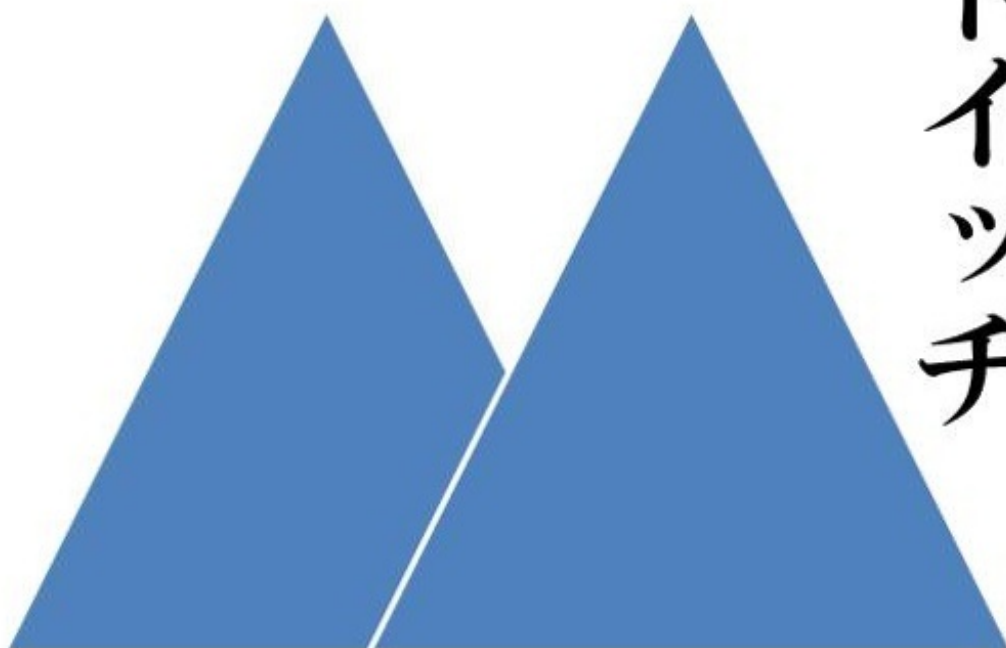


回転展望台と サンドイッチ



作 池田真哉

さおりんが、駅に着く頃なので急いでいた。駅チカのレンタカー店に立ち寄り、カウンターで簡単な手続きを済ませ、車の周囲をぐるっと回り、現況確認表にサインをする。店員からキーを渡され、車に乗り、シートベルトを装着しアクセルを慎重に踏み込み出発した。駅を挟んだ反対側のロータリーまで移動して、さおりんをその片隅で待っていた。駅の階段下から、さおりんが大きなリュックを持って歩いていてくるのが見える。そして、車に近づき、扉を開けた。

「おはよ。待った？」

「いや、いま、来たところ」

さおりんと会うのは2回目だった。ネットで知り合い、1回目のデートの時に、筑波山ドライブに誘った。車の中では、思い浮かんだことを言葉にして、話し続けるようにした。言葉は、二人の距離を近づける。

国道6号線に入り、車も会話も快調に進む。肝心の会話は、何の話をしたのかあまり覚えていない。頭に浮かんだことを口にしていたので、大して重要ではないことが、ほとんどであったと思う。しかし、重要ではないことを話し続けるうちに、重要なことも話している可能性もある。なにしろ、重要かどうかなんて、自分が判断することでもなく、さおりんが決めることだ。僕が当たり前のこととと思っている自分自身のことも、さおりんにとって、驚くべきことであるかもしれない。話しをして、次々と話題が連鎖していることが楽しかったし、さおりんの反応がなにより心地よかった。

国道6号線を北上し、牛久沼を超え、土浦を通り過ぎ、筑波研究学園都市へと入り、大きな整然とした道路に差し掛かったところ、僕の書いた本のことについて、さおりんが話し始めた。さおりんは、僕の作品をすべて読んでいた。読んだだけではなく、作品の細部のどこがいいとか、事細かに感想を話した。もう、それだけで、すごく感激した。なぜなら、2冊目の作品については、積極的に感想を話してもらえたという状況が、今までにあまりなかったからである。こちらとしては、ここがいいとか、悪いとか、批評を受け入れる体勢ばっちりあったのに、批評自体ほとんどなく、あっても刺さるものがない。反応がないとしか言い様がないような感想ばかり。もしかしたら、あまりにも、色々なことを露骨に書きすぎたせいか、話しづらいとか、そんな類かもしれない。僕を知りうる人たちが、僕の赤裸々な感情だと思われるものを目の前にするとたじろいでいるのもかもしれない。本当はそんな話はフィクションなのに、あまりにもリアルに感じるから、まったくもって、僕のことだと思い違いしている。そうだとすると、僕の勝利だ。完全なる勝利だ。そう思おう。それか、おそらく、話しづらいテーマを書いたというだけかもしれない。それだけなのかもしれない。

1冊目を書いたときは、賛否両論あり、最高の褒め言葉の時もあったし、どこがよいのだからさっぱり分からないと言われることもあった。それなりに、刺さる感想もあったし、ぎしぎしくる言葉もあった。百人いれば百とおりの読み方があって、こんなにも人というのは、見る角度が違うものなのかと驚かされることもあったし、また、非常に参考にもなるものもあった。

2冊目についても同様に手応えのある感想を求めていた。それに適確に応えてくれたのがさおりんだった。さおりんには、僕のことをわかってもらえているような気がした。

よく晴れた青い空に周囲の新緑が気持ちよくて、窓を開け、外の風を中へ入れる。いつも遠くに見える筑波山の2つの頂きの男体山と女体山の見慣れたシルエットが、大きく眼前に迫る。車のスピードを早めると、周囲の景色がより一層、早く流れる。

隣には、さおりんが座っていて、外の景色を眺めている。今度は、しばらく黙っている。黙っているのも、またいい。お互いの空気をなじませている時のようであった。

楽しい思いだけをして、悲しみの導火線には触れずに、新しい時間にだけ乗り込む。それがいい。もう、このままがいい。今のこのままの時間がずっと続けばいい。昔の記憶をなくしたいという思いが芽生える。このまま、さおりんとドライブをしたい。

筑波山へ近づく道は渋滞していた。麓の駐車場に停めることにした。ストレスをためこんで待つより、歩いて登ったほうが気持ちいいだろう。

麓の駐車場からケーブルカー乗り場まで相当の距離があった。おまけに当然のことながら道は確かな勾配がつき、後ろに引っ張られながら歩いているような気さえする。さおりんは僕の後ろに続いて歩いている。手を差し出そうと思ったが、僕らはほとんど会ったばかりだし、付き合ってもなかったので、手をつなぐわけにもいかなかった。

なかなかケーブル乗り場までつかない道すがら、ハイキングが始まる前に歩かせてしまって申し訳ない気がすると同時に、今日はハイキングなのだから多少は歩いても構わないだろうと自分の中で言い訳をしながら、渋滞で並ぶ車の横を歩いて行った。

5月の心地よい日

この季節が昔から好きだった。

ケーブルカーは急角度に登っていく。

ゆっくりと推移する樹木と繊細な木漏れ日。

まわりの乗客の顔も生き生きとしてくる。

そして、笑顔になり饒舌に賑う。

ケーブルカーの終着点につき、大勢のハイキング客に入り混じりながら、男体山と女体山の間をつなぐ場所へと移動していった。遠くの景色を見て、感嘆する人たちや、食事処で昼食を楽しんでいる家族連れや若いカップルなどで溢れかえっている。左を見れば男体山で、右を見れば女体山の頂きがすぐに見える。そこへ至る道も右へ左へとくねくね曲がりながら続いていくのが見える。記念写真を1枚撮って、男体山へと向かった。男体山へ登ることは始めから決めていた。

上に行くほど、急な岩場が現れ、ハイキングする者たちが行列をなしていた。上までつくと、社があり、社の周りをぐるっと回って引き返すコースとなっていた。関東の頂きに立って、どこまでも遠くまで見えたが、人ごみの中、頂上での眺めを、ゆっくりとした気分で眺めることはできなかった。さおりんは、リュックから御朱印帳を取り出した。

「御朱印をもらってくる」

「どこで御朱印を書いてもらえるのかな」

周囲を見渡す。

「あそこ。あの場所で書いてもらえるの」

頂き近くに小屋があって、その中に白い服を着た人がいる。さおりんは、御朱印帳を出し、その空白の頁に、豪快な御朱印を頂いた。さおりんは、行く先々の神社仏閣で、御朱印のコレクションをしている。神社仏閣ごとに書体が違うなどして、その違いを見比べると面白い。

「記念になるね」

そうして、もと来た道を下り、男体山と女体山の間の場所へと戻った。まだまだ、時間もあり、もう少し歩きたい気分であったので、ハイキングコースを二人で探していると、男体山の周囲を巡るコースの入口を案内する標識を見つけた。

その入口へ向かい、ハイキングコースへと立ち入った。しばらく歩くと、さきほどまでの食事処や男体山へ向かう山道の喧騒が嘘のように静まり、小鳥の啼く声と、木々が風に擦れる音しか聞こえなくなった。

「すごく静か」

「さっきの喧騒が、どこかへ行ってしまったようだね」

山道を下っていった。

「ずっと、下っていると、きっと登る時がくるよ」

「そうよ。なんか、登り坂がくると思うとこわい」

さおりんは、ハイキングコース横に生えている僕の知らない植物の名前を教えた。

「これが一輪草で、こっちが二輪草」

「よく知っているね」

「高校生の頃、生物部だったから」

「中学生の頃は、バレーボール部だったよね」

「うん。そうよ。でも、バレーボールの先生が、相当なスパルタ式だったから、高校生になったら、運動部は絶対に入らないと思って、生物部にしたの」

「そうだったんだ」

しばらく歩き、また、僕の知らない植物があったので、名前を聞いてみた。すると、さおりんは、リュックの中へ手を入れ、本を出した。

「えっとね。それはね。これよ。ほら、同じでしょ」

「えっ。植物図鑑を持ってきたの？」

「そうよ」

「大きなリュックだと思ったよ」

山道を歩いていくと、急に登り坂となり、急峻な崖地に差し掛かった。一步一步の太ももを上げる角度が高くなり、太もも裏の筋肉が張る。次第に息も上がり、ゆっくりとした歩みとなる。さおりんの呼吸も聞こえるようであった。さおりんの手を握って、引っ張りたかったが、躊躇

して、手を握ることもない空虚な手の平をぶらぶらとさせていた。時々、後ろを振り返りながら。

そうして登りきったところに、右へ行くと展望所と書かれた標識が立っていた。右へ曲がりしばらくいくと、青い空が木々の間から顔を覗かせ、さらに進むと、大きく視界がぱっと開けた。

崖の突端の岩場から、空とのキス
関東平野の平たい地形が、果てしなく続く
遮るものはなく、飛び立つかのよう
どこまでも広がる大地の水田は、鏡のように空を映す
心は鳥
空に一番近いところ

しばらく、さおりんとその岩場に座っていた。

登り坂のきつい山道を登ってきて息が上がっているのと、拡がる景色に吸い込まれそうになっていたのと、その両方だと思われるが、しばらく黙って座っていた。

空の音や、森の音や、風の音や、遠くのとんびが旋回する音や、小鳥が小さく啼く声が聞こえてくる中、長い間、黙って座っていた。

十分、休息をとり、その場を堪能し終わると、2人は、いこっか！ といって、また、歩き始めた。そのあとは、さほどな山道ではなく、平坦に歩けるところであった。

そして、ハイキングコース入口にある茶屋に出た。

少しお腹がすいていたので、茶屋の中へ入って、なにかを食べようと誘うと、なぜか、ためらうような、素振りをした。

「実は私、サンドイッチ作ってきたの」

ゆっくりとリュックサックのチャックを開けた。

「えっ！ どうして、持ってきたって言わないの」

「なんか、言いそびれちゃって」

「じゃあ、どこかで食べようよ」

「そっちは、店のテーブルでしょ」

「だいじょうぶだよ。あー、だめかあ。じゃあ、こっちに行こう！」

「どっち？」

辺りを見渡しても適切な場所がなかったので、少し遠くに見える場所を指して言った。

「あの展望台にいかうか」

展望建物の1、2階の室内は、フードコートになっており、屋上が展望台となっている。その1階から急な螺旋階段を上ると、幾分狭いと感じられる屋上に出る。円形の屋上の外周部にはベンチが置かれており、そこに座った。

さおりんは、リュックサックからタッパーに入ったサンドイッチを出して、僕に手渡した。さおりんが作ったサンドイッチは、サララップにぐるぐる巻きにされていた。それを慎重に取りはがして、二人で新緑が美しい筑波山の麓の景色を眺めながら、サンドイッチを食べ始めた。ソーセージが口の中ではじけた。卵の塩加減と柔らかさが濃厚に口の中に広がった。

床がきしきしとなる。周囲を見渡し状況を確認していった。

「この展望台、回転してない？」

「なんか動いている」

機械仕掛けの動きで、ぎしりぎしりと思うより早く回転している。周囲の見える風景は、思ったより早く移り変わる。さおりんの横に座り、さおりんが作ったサンドイッチをほおぼりながら、さおりんとゆっくりと回転している。振動しながら回転する少し古風な展望台の上で、僕らは笑顔になっていた。

しばらく、さおりんと、サンドイッチを食べていた。回転しながら食べていた。

あまりにゆっくりしすぎているように感じたので、そろそろ、降りようかといい、ケーブルカー乗降口の方をみると、長い行列になっていた。もう夕方になる。山を降りるときはみな一斉におりはじめる。

ケーブルカー沿いの急峻なハイキングコースを歩いて下りていくか、ケーブルカーにのって下りるか、どちらかの方法があった。僕らは、1時間待ちのケーブルカーを選んだ。待っている間、話し続けた。とにかく、思い浮かんだことを言葉にした。さおりんとの会話は心地よい。仕事のことや学生の頃のこと、筑波山の食べ物のこと、テレビ番組のこと、旅行のこと、昔のおもちゃのこと、ゲームのこと。たわいのない話だったと思うが、僕の記憶がさおりんの記憶になり、さおりんの記憶が僕の記憶になっていく日もそう遠くないような気がしていた。言葉を交わすことによって、お互いの中へ入っていける気がしていた。

帰りのケーブルカーは、大勢の行楽客を乗せて、山の斜面を急角度に落ちていった。

回転展望台とサンドイッチ

<http://p.booklog.jp/book/80876>

著者：池田真哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ikeshin55/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80876>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80876>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ